

特 60

606

滋野源藏編輯
掌中知日考

全

滋野源藏編輯

掌中知日考 全

東京 書肆

辻岡文助發兌

掌中知日考

凡例

特60

夫此知日考ハ當今新發明よりて明治十四年
間何月幾日よても曆をととほして七曜及干支
の當直乎得るの題と設け其題先甲子庚申等
の數回と歌よ綴り指の先よて繰りても直よ
知ることを記載を誰々も常に記臆し置とた
よと人の雇婦盲人と虫も何月幾日ハ何の日よ

當るとりよん我掌の中より速に辨き或る又
 旅行船中なるよりて曆と不携場所に至り自他
 の用便或達し一時の與とをみる處し尤も季
 節及入梅社日の如き正の時日と指する
 至らむ唯其概畧を解まの若明細と知らん
 と欲せば年々官より頒布せらる本曆の詳記
 一りよん爰に不俟言到抵この設題の意味と
 自得する時の本年一月題と知る一月題と知

とを月々の題と知るべし如斯なれを翌年と
 之ども今年月未の干支より推し及む時の轉
 く知るに至る然らむ則此未何年よても其年
 月々の設題と得て日取と知る人々の掌中
 一りよん又未の干支の生克を以て日々晴雨
 と知るの術と載れを前より所謂干支と縁る
 の題爰に至りて甚と有驗あるものと思量
 せべき而已

東京薬研堀町居住

明治十三年十月

滋野樹山

掌中知日考

○大祭日ヲ知る歌二首

○一一月一日一一かる一一三日二月又二三十日三月又三廿日日あり

○四四月々三日九月九九ハハ廿二三三日日十十七七日日十一月十一月々三日日廿二三三日日

○月ノ大小ヲ知る歌三首

○一三五七八十や十二月日数三十一日とあれ

○二月のみ廿八日四六九キ十一月八日数三十

○閏とろひ月四年と一度其時ハ二月の末と一日と増まし

知日考

三

○明治十四年月々七曜の當値日と繰る題
 一月六 二月二 三月二 四月五
 五月無 六月三 七月五 八月一
 九月四 十月六 十一月二 十二月四
 此題數ハ譬へば一月十五日の値と看んと思
 ふ時と一月の題數六と置十五日を加へ七
 曜の七ツ引二七十四引ハ七残る是と七曜の
 頭より。日月火水木金土と順引とたへ則

ち十五日ハ土曜日當るより五月廿日の値如
 何と見るより五月題無るれを直よ二十日と
 置二七十四引ハ六残る。日月火水木金と則
 金曜日なり余ハ此例よて知る人

○七曜の題と知る歌

○七曜ハ六二二五無三五一四と六とそハ二と四と
 此哥と記臆るより一月題數六より順よ十
 二月の題數四までを月數ふ當る覚ゆる時

ハ何月ハ題何よりと知るなり

○日曜日の幾日と知る歌

○日曜ハハツと置て其月の題を引る負う初日を
 譬へを一月何日か日より日よ當ると見るハ
 先ハと置此内より一月の題六と引を二残る
 則ち二日始めの日より日と知る是へ七と加
 ふれを九とふる則ち二度目の日曜九日ふり
 是へ又七と加ふれを十六日とふる三度目日

より日なり余ハ此例よて知るべし

但し何曜日よても首め日より日よりかぞへ
 て當る日を置て題数を引残の数が其月
 を下めの値とあらべし

ふとくバ土曜日と知らんと思つて日月火
 水木金土と七ツ置一月題六ツ引ハ一ツ残
 あまの則ち一日ウ始めの土曜日なり是へ
 七ツかふれを第二第三と速よこころなり

且火曜日の如きの三ツみまば一月の題六引
 を如此つまうたる時ハ三へ七張より六と引
 を四とみる則ち四日火曜日なり都てとの例
 又知るべし

○七曜日順。日月火水木金土
 六の順も常々記憶しおくべし

○

○明治十四年月々十千の當る日を知る題

一月一	二月二	三月無	四月一
五月一	六月二	七月二	八月三
九月四	十月四	十一月五	十二月五

此題數ハ譬へば一月十三日千何ふ當ると看
 るよハ一月の題數一と置十三と加へ十千の十
 と引を四残る千の頭より甲乙丙丁とらる時
 ハ則ち十三日の千ひのとよ當ると知るべし
 又三月十八日の千と見るよハ三月題數みけ

れを直さす十八日と置定ちぎ數十と引八残のる。甲乙丙丁戊己庚辛と繰くる時の則ち十八日へのかの日のよ當ある余への順よんして知るべし

○十幹じゅうかんの題と知る歌

○えとのうり一二無一そ又一二二三三四の四と五六七のうり
此歌も暗唱あんしょうし置べし之も一月の題だい一より二月三月と題と月順げんよ覚おぼえべし十二月題五よて止とどまる何月よてもこの題と用ひて日取ひとりのえ

と残得るあり

十幹じゅうかんの順よん 甲か乙い丙へい丁てい戊ご己こ庚こう辛しん壬にん癸かい

○

○明治十四年月々十二支の當ある日と知る題

- 一月いちがつ 二月にがつ 三月さんがつ 四月しがつ 一月いちがつ
- 五月ごがつ 六月ろくにんがつ 七月しちがつ 八月はちがつ 二月にがつ
- 九月くがつ 十月じゅうがつ 十一月じゅういちがつ 十二月じゅうにがつ 三月さんがつ

此題數たへたとくを一月七日の支しと知らんと

思つ一月の題七と置七日と加へ十四とみる十
 二支の十二引を残数ニツるり首より子丑と
 らとバ七日も丑の日と知るなり又七月の十
 六日の支と知らんと欲せを先七月の八を置
 十六と加へる時の廿四とみる是と定数十二
 引残数十二と首より。子丑寅卯辰巳午未申
 酉戌亥とられを十六日の亥の日より余の準
 トてあるべし

○十二支の題と知る歌

○十二支の七二六一七二八三十四あり十。一と五。

あとも一月の題より月順よ覚やへ十二支
 順常の通り

○甲子と知る歌の事

○甲子の本年ぞ奇の月より其月毎のえとの三目
 たとくを甲の日を何日と當ると知るるる半
 の一月あるを甲と十一と置千の一月の題一

引ケバ十とある則ち十日初めの甲の日あり又
 是へ十干の十を加ふるとバ二十日甲の日なり
 又十を加ふれを三十日甲の日なり
 ○子の日々十三と置支の一月題七引ケバ六
 残る則ち六日子の日なり是は十二を加ふれば
 十八日子の日あり又十二を加ふれば三十日子
 の日あり干の三十日まのくるまは合して甲子
 を一月三十日と知るべし

○庚申を知る歌の事

○庚申是もあまドク奇の月其月末を繰て知るべし
 たとんを庚の日と何日よ當ると知るまは先ッ
 甲乙丙丁戊己庚とかぞふう時へ七ふて止る此
 七より干の一月題数一と引を六とみる則ち
 六日初の庚の日なり是へ十干の十を加ふれば
 十六日二度目庚の日なり又十を加ふるとを三
 度目庚の日ありと知る。申の日へ先子丑寅

卯辰巳午未申と九を置支の一月題七を引
 をニと余あまを則ち二日申の日なり是又十二
 加くはふれば十四日申の日なり又十二を
 加くはふれば廿六日申の日よ當るなり前まへの庚の廿六
 日と合あはれを庚申と知るなり

○己巳と知る歌の事

○こゝまらんとそ本年こゝの調度遇てうどの月月げつげつのかららとと繰くるるに
 たよたのの己巳こゝの日と知らんと欲ほままれればば己こゝとと六ろくと

置二月干えの題二を引ひケハ四残しよる則ち四日つち
 のとの日あり○己こゝの日是ゆ六と置支しの二月の
 題二引ひケハ四ふり則ち四日己こゝの日となる干えの
 己こゝと合あはれを己こゝ巳しの日二月四日と知るなり
 以下遇ぐの月げつなる此例こゝにて知るなり
 但前まへ祭まつり又また奉たがる日曜日甲子庚申か及および己巳
 の日と知るの外七曜干支え何なにの日ハ何なに日ひよ當
 ると見るハ七曜干支えとも其求もとむるの終首しゆう

よりりかぞへて其數の内より其月題數と引き
其月初モトの其日と得る尤も前条と見合せて注
意いと加ふべし

○八專せんを知る事

夫八專せんハ壬子みづのね入癸かみの亥のの日明あきあり都て
十二月間内比和旺氣きあり日八日比和せざる
日四日あり此日と間日まとりふ則ち戌辰丑午の
四日あり又子寅卯巳未申酉亥いなる比和旺

氣きまざる故又陰陽いんやうの氣偏へんり循環じゆんげんせきよめく
雨降あめふるとるハ必かならず霧きりとあま世よの諺ことわざ照八專
降八專あめふとつハ是ハ八專せん入る日雨降ハ八專中
日ひ和あまり入る日日和あればハ八專中雨降あめふなり
尤も二日目の雨あめをあらふ是ハ八專二專と云
二日目の雨あめハあまめと霧雨きりあめとあり本年ハ
專せんの入り明あけと左ひだりに記しす

一月十八日壬子入り同廿九日癸亥明あけ

三月十九日壬子入り同三十日癸亥明ケ
五月十八日壬子入り同廿九日癸亥明ケ
七月十七日壬子入り同廿八日癸亥明ケ
九月十五日壬子入り同廿六日癸亥明ケ
十一月十四日壬子入り同廿五日癸亥明ケ

○ 季節の事 ○

夫季節も一年三百六十五日有奇を以て廿四

分ち一季各十五日二時三十分余あり新曆ハ
舊の十二月を以て一月と充る故に小寒を季
節の始めと一二月五日欽六日頃置之則旧十
二月の節と凡夫より十五日目と大寒と凡是
旧曆十二月中あり又十五日目と立春とを尤
年の気運日の有奇を計り曆法を以て或ハ十
四日間と一季と定め或ハ十五日間十六日間
の伸縮の挙ありと虫も概畧一季間十五日

と心得てよ

社日

○三月廿日頃春分は近き戌の日なり

○九月廿二日頃秋分は近き戌の日なり

○三月春分の日と中日と一前三日後三

日合せて七日なり

彼岸

○九月秋分の日と中日と一前三日後三

日合せて七日なり

小寒

○一月六日頃

大寒

○一月廿二日頃

節分

○立春は入る前日とて二月三日頃

初午

○新暦二月五日。旧暦三月十三日

八十夜

○立春より。八十八日目とて四月三十日。五月一日頃より。世は余波の霜とりぬ

○旧暦の五月の節の初の日と壬の日と入梅と

六月の節の後壬の日と明きと

入梅

○新暦の六月芒種の季より。五日目と

用也六月十日頃それより三十一日目と
明きとひ七月十一日頃

夏至

六月廿一日頃とひ五月は六陽極つて
六月は至一陰地は生むと云は天風
始とひ

冬至

十二月廿日頃より十一月六陰極つて
十二月は至て地下は一陽復さふと云は
地雷復とりふ此日日輪行道始めあり

二百十日

○立春より二百十日目あり大率八月三
十一日頃立春より處暑の終りまで
二百十三日あり九月秋の金氣盛んよ
して處暑の残火金氣は克して大
風雨吹く時節あり

土用

○四月十七日頃 七月十九日頃
十月廿日頃 一月十八日頃

○七曜及幹支の月題の原因を知る法

○術^{ぶつ}よ曰先七曜一月設^{せつ}題六と立^た一^{いち}の
 值^ち土曜^どより縁^{ゆかり}て七曜の内土と一ツ引を六
 残^{のこ}るこれ則ち題六の起^き例^{れい}なり二月の題二
 と置^お一^{いち}の二月值^ち火曜^かより因^よて七曜のうち
 火水木金土と五ツ引ハ二ツ残ること則ち題
 二の原^{げん}由^ゆなり
 ○十^{じゅう}幹^{かん}の題一月一と設^{せつ}け^け一^{いち}の一日の干乙^いよ
 らり依^よて十^{じゅう}干^{かん}の内乙丙丁戊己庚辛壬癸と九

引^ひヶ^が一^{いち}ツ残^{のこ}る之則ち題一の出^い處^ちあり三月の
 題無^なハ一日の干甲より因^よて十^{じゅう}干^{かん}の内皆^{みな}引
 を残^{のこ}敷^きなりと^と則ち無^な題^{だい}なり余^よを準^{じゆん}トて
 知^しる^るべ^いし
 ○十二支一月の設^{せつ}題七と立^た一^{いち}の一日の支未
 よりり倚^よて十二支の内未申酉戌亥と五引バ
 七ツ残^{のこ}る^るま^ま則ち題七の出^い處^ちあり三月題六
 と設^{せつ}く之^のハ三月一日支午よりり依^よて十二支

の内午未申酉戌亥と六ツ引バ六残る是則ち
 題六の發起ひらきより余へ此例よ推て知るべし
 但前の七曜の部ぶは出處いっしょの日曜日のも幾日
 一當ると見るの法ほうへ干支の部ぶも同一理なり
 先ま干の甲の日と何日なんじつと知らんと欲せば何月
 よても十干の十よ一ツ増まし十一と置其月の
 題數と引残りの負ひ十のまゝ十日と知る又
 庚の日へ何日と見るよへ何月よても甲より

庚まで數ふとバセツまり此内其月題數を引
 残りの數をドめの庚の日何日と知るより夫
 より十日宛と増バ二度目三度目よめ知とる
 なり。十二支の部も子の日何日よ當ると看る
 ろへ十二よ一ツ増まし十三と置其月の題數を
 引残りの數始はじめの子の日と知る又申の日何日
 と見るよへ子より數へ九ツ目則ち申より依
 て九日始の申より夫より十二を増バ二度目

又十二と増せば三度申の日の何日と知る何
 の日よても皆同ド繰りまて知る尤も數足ら
 びりて引ケざる時ハ十干あるを十と足りて題
 を引盡し十二支るらば十二を足りて題と引
 べし總ドて日曜日甲の日子の日と首計りハ
 一ツ増し余ハ何の日よても首より其日多きを
 數へく題と引るり

○五行の生克と以て晴雨を知る法

○十幹の五行

○甲乙ハ木。丙丁ハ火。戊己ハ土。庚辛ハ
 金。壬癸ハ水

○十二支の五行

○亥子ハ水。寅卯ハ木。巳午ハ火。申酉ハ
 金。辰戌丑未ハ土

○陽干陰干の事

○甲丙戊庚壬ハ陽干るり

○乙丁巳辛癸陰干なり

○陽支陰支の事

○子寅辰午申戌の陽支なり

○丑卯巳未酉亥の陰支なり

△未述の毎日十干十二支の相生相克比和等を以て晴雨と考ふる法なり依て前より記す十干十二支の五行并二十干十二支の陰陽を覺べり次に相生相克比和とい左の如し

○水生火。○火生土。○土生金。○金生水

○水生木

○木克土。○土克水。○水克火。○火克金

○金克木

○五行比和とい左の如し

○木旺木。○火旺火。○土旺土。○金旺金

○水旺水

△右の生克比和を記臆し置べりたると人を甲

子の日の晴雨せきと知らんと思ふ先甲あの木の
 子ハ水みづなり是水みづ生木きと支しより干かんと生なむ之と
 逆さかの相生せいせいと云奥おくの晴雨せきと考かんる処ところを引合ひあせ
 見るべし又甲午かみの日晴雨せきと知るも甲あを木
 るり午みづハ火ひなり是木き相火さうかと干かんより支しと生なむ
 之と順じゆんの相生せいせいとり又奥おくを引合ひあせ見る
 至いたし庚寅かうの日の晴雨せきと知らんと思ふ庚かうハ
 金かねなり寅いんハ木きなり是金かね克く木きと順じゆんの克くなり

奥おくより引合ひあせ見るべし其外ほか逆さかの相克せいせい比ひ和わ
 等と右みぎに準じゆんトて毎日まいにち十干じゆ十二支じふにの五行ごうぎやうを以もつて
 晴雨せきと知るべし

○生克晴雨の例

- 順じゆんの相生せいせい 干かんより支しと 天氣てんき晴はて風かぜあるなり
- 逆さかの相生せいせい 支しより干かんと 天氣てんき曇くもりて雨降あめお
- 順じゆんの相克せいせい 干かんより支しと 天氣てんき晴はるなり
- 逆さかの相克せいせい 支しより干かんと 大雨降あめなり

又比和まるるとい木と木同ト性の日とり譬
 へを甲寅の日へ甲も木なり寅も木なり是を
 木旺木とて比和まる日なり丙巳の日も丙も
 火なり己も火なり之と火旺火と比和まる之
 例左の如し

- 木旺木の日ハ風吹まり。火旺火の日ハ晴まり
- 土旺土の日ハ曇るまり。金旺金の日ハ半晴半雨
- 水旺水の日ハ風吹まり

△右ハ晴雨定例るれども又十干十二支の陰
 陽よりうつろふんどうせうの大同小異なり左の如し

△其日陽干陽支なれば其應甚しうかりまはいふと人を
 甲子の日へ甲へ木の陽なり子へ水の陽なり
 陽干陽支の日と比前の例よてい甲子をくも
 りて雨あめふり冷とらきども陰晦と甚しとされ
 をつひろ雨あめふりあり陽へ伸るのびとを司つかさどり
 るとを陽干陽支の日へ陽の気重り伸るのびとも

強し故に曇る日の必き降りあり曇りうまけ
 道を随て晴も十分あり判断注意を加ふべし
 △其日陰干陰支まれ其應も少くたるとを
 乙丑の日のごとく己の木の陰あり丑土の陰
 あり是と陰干陰支より此日前の例よて晴
 られどもさつありと晴を少くしむる
 陰し尤も陰干陰支も陰へ縮ると司ども故に
 多くも雲去て晴るあり陽干陰支陰干陽支と

雜るるのへんを前の例よてよるしとに又順
 の相生順の相克と雜し陽干陽支と以ておす
 時の必き雨なり逆の相克より大雨降の例な
 れども陰干陰支を加ふる時の却て雨止と
 曇る日の雲去つて晴ると知るべし又入梅
 八專みどの雨天續きたるとに必き晴る
 の考へても天地の氣運よて多きよ曳りは
 長きよ巻るの譬への如く降雨の強きよ曳

是て随て降つべくものあり然も雨止む氣
運よ至きを必お前の考へ日和の例よて上る
べし又夏日温熱の際幾日も日和續きたる時
も前の霖雨の時と同どく強よ曳きて大雨降
或の半晴半雨の例よても供よ日照まるとり
尤春夏の陽干陽支の伸ると強よんが曇るも
深くとも必お晴れ雨氣を持ると降るも
強しと知る陰干陰支の縮むと弱なれを其日

曇れを必お降り曇り浅なれを晴ると考ふべ
し秋冬の陰干陰支縮む事強さを以て曇り深
く雨氣とのつと虫も必お晴ると知ると陽
干陽支の伸ると季節よ随つて弱し其日曇れ
べ必お降る曇りころづらまよて却つて晴ると
考ふべし又陽干陽支なれども其日急雨あり
を後へ晴かり陰干陰支なれども其日四方よ
雲なく晴渡る時夕辺り夜よ至つて降りと

知るべし

但盛夏の夕立の雨の例はあつど冬日の雪

の日和と見るべし

右の判断の四季共は陰陽伸縮の挙動は倚

り或は前の相生比和等の理は照會し注意を

加へ其日の晴雨を決まべし

掌中知日考畢

御届明治十三年十一月一日

定價四錢五厘

日本橋區

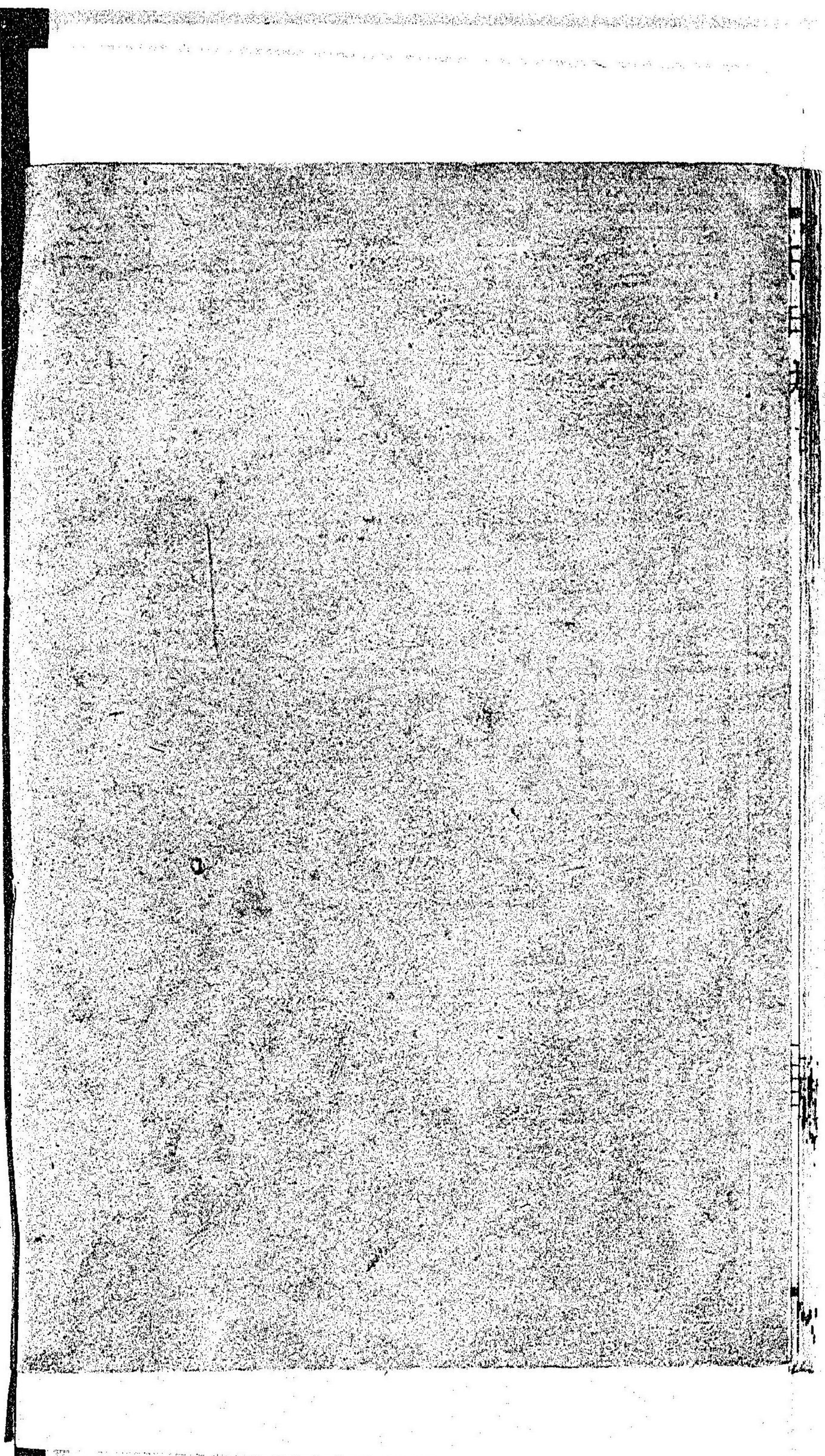
藥研堀町廿七番地

編輯兼出版人 滋野源藏

同

横山町三丁目二番地

發行人 辻岡文助



特60

608

滋野源藏編輯
掌中知日考

全

056152-000-8

特60-608

掌中知日考

滋野 源藏/編

M13

CAK-0032

